

## シリーズ・海外だより その16

## インドネシア いろは

パシフィックコンサルタンツ株式会社  
水野 要



執筆中の11月初旬、インドネシアは3月までの長い雨季への変わり目です。10月頃からジャカルタ市内では、あちらこちらで側溝や埋設管の補修工事が。人力で掘起こされた赤土の山がよく見られます。比較的小さな側溝は、年々回数の増える大雨の都度、バンジール（洪水）とも呼ばれる道路冠水の原因となります。ですからあせって工事しているかといえば、この国の方のおおらかさからでしょうか。ぽつぽつ降り出した雨の中でも現場は鼻歌混じり。よく使われるインドネシア語「ティダアパアパ=気にしないで・何とかなるさ」を体現している景色は、通勤時にジャカルタ名物大渋滞（マチュット）に巻き込まれてる間でも、ニヤリとさせてくれます。



インドネシアは先月に新しい大統領ジョコ・ウィドドさんが就任。現職州知事からの転身と、平和な政権交代を同時に成功させた政治家の下、インドネシア経済は成長の期待に満ちています。ジャカルタ市内には、先に柱と床だけが作られる高層ビルの現場が、さらに増えそうです。それを見ながら、時々既視感がどこからくるか考えてみると、私が子供のころにはまだ続いていた、高度成長期時代の景色にそれにそっくりなことに気がつきます。当時と少しだけ違うことがあるとすれば、既に携帯電話があることと、収入格差がよりはっきり見えることでは



うか。

市内のショッピングモールには、日本食も含め多くのレストランがあります。ここで平日の夕食をとれば、お酒なくとも1食2～3,000円程度。より高いお店では10,000円にも。一方、町の屋台に行けば

200円です。これらが細い裏道を隔て隣立している景色が、この国の成長の様子を可視化してくれています。

しかしそれでも、この国の方の良い意味のおおらかさは、そんなことは些細と笑い飛ばしてくれます。これを直にご覧になりたい方には、大道芸をお勧めします。

ジャカルタ市内、海側の街コタ（KOTA）には、オランダ植民地時代の建物が残っていて、多くの観光客が訪れます。広場にはこれを見込んだ、実に「キラキラ=だいたい、おおよそ」な芸を披露する方が。秀逸なのは静止芸です。軍人の銅像を模して体を銅や銀に塗った芸人が、ぴたっ!と止まって・・・1分で確実に動き出します。1度動き出したらもう次々と。10秒も止まっていられなくなり、むしろ観光客におもちゃの銃を渡して、記念写真を撮らせたり、目を凝らせば周りには黄色や緑のピンクで闊歩する軍人がいたり。インドネシア真の伝統芸能は早めにご賞味ください。

かくいう私も、現地の仲間から見るとなかなかいじりやすい人間らしいです。入国して浅いころ、勤務後、帰宅のために車に向かうと、ドライバーやガードマンが一斉に、「Happy Birthday♪」を歌ってくれたのです。感激したのですが、問題は私の誕生日が半年先だという点。先輩に何うと、こちらでは誕生日を迎えた本人がケーキを配るとの事。「つまり奢れってことでしょうか?」「そうだね。たかられてるね」「先輩言われたことは?」「ないよ。」「……」。や、でもあれですね。早々になじめたってことですよ。最近はお菓子のおすそ分けもってきてくれたりするし……。なんて悩んだりいたしません。

マレー語を親とするインドネシア語では、「どういたしまして」は「サマサマ“sama sama”」です。「サマ“sama”」1回だったら「同じ」。「同じ同じ」が転じて「一緒に」、「お互いさま」そして「どういたしまして」に。

こんな素敵な言葉を使っているインドネシアの方たち。人懐っこさを味わわなかったら、この国の魅力の半分が気がついていないといえましょう。

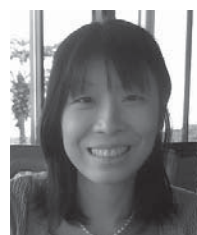
「Kamu lucu! (君面白いね!)」「サマサマー!」

## シリーズ・海外だより その15

## アメージング・ミャンマー

日本工営株式会社 ヤンゴン事務所

島田 菜穂



ミャンマーと聞くと何を思い浮かべるだろうか。ビルマの豎琴、黄金のパゴダ、スー・チーさん。数年前まで閉ざされた国という印象が強かったかもしれないが、近年は日本でもミャンマーに関する報道も多く、大きな変革期を迎えているこの国の熱気が海外にも伝わってきているのではないかと思う。街を歩けば伝統的な巻きスカート(ロンジー)を着た人々と、Tシャツにジーンズに茶髪という今時の格好をした人々、そして外国人の姿が混在し、文明開化の香りがする。

仕事でミャンマーに関わるようになって3年、ヤンゴンに住み始めて1年になる。ミャンマーは良くも悪くも驚かされることの非常に多い国、予期せぬことが多数起こる国というのが私の印象だ。まず人が優しく、人と人の距離が近い。一緒に働いているローカル・スタッフは何ともアットホームで日々の会話に笑いが絶えない。日本に休暇で一時帰国する際にスタッフから「これ、日本のご家族に。」とお土産を渡された。これまで、日本のお土産よろしく、と言われたことはあっても逆にお土産を託されるとは思ってもみず、驚きとともに心温まった。また、ヤンゴンでの事務所開所パーティーの際、お坊さんを朝6時に事務所に呼んでミャンマーの伝統的な方法で開所儀式を行ったが、その前日は準備のためにスタッフたち自ら泊まりこみでスタンバイしたいと言いだし、彼女たちは一晩事務所で過ごした。他の国では定時に挨拶なく帰るスタッフたちに慣れていたので、泊まりこみで働きたいと言われようとは思ってもみず、これまた驚いた。



もちろんミャンマーでは生活面の不自由さは多くある。停電は日常茶飯事、インターネットは非常に遅い、また携帯のSIMカードを買うのにいまだに2万円くらいする、日本円は換金できないし、ドルでもピン札でないと受け

付けてもらえない、などなど。鳩侵入事件というものもあり、住んでいる部屋がいろいろと被害を受けたのだが、あとでミャンマー人に話したところ「そうなの、鳩たまに部屋に入ってくるのよねー。」といたって普通。大騒ぎした自分が恥ずかしくなってくる。

観光資源も非常に豊富な国である。日本と同様、南北に長い国なので、気候や風土の違いをその土地ごとに味わえる。世界三大仏跡のあるバガンは、どうしてこんなにたくさんの仏塔があるのか不思議で仕方がないくらい、本当に多数の仏塔があり、その上から見る朝日、夕日が素晴らしい。シャン州のインレー湖も観光地として有名だが、いわゆる湖畔リゾートとは一味違う。湖の上にホテルがあり、お寺があり、畑があり、村がある。湖上に電線が伝わっており、水上生活が見事に形成されているのだ。その他にも手つかずの美しいビーチや、雪山(ミャンマー最高峰カカポラジ山は標高5800m級!)もあり、見どころたくさんだ。



最近訪れた場所はタウンジー、年に1度のバルーン・フェスティバルで知られている街である。空に気球を浮かべる優雅で幻想的な風景を想像していたが、実際は紙製の気球の下に花火をつけて飛ばす、というやや危険で過激なもの。最初の一つ目から地上を離れていきなり炎上、花火を撒き散らしながら落ちてしまいあわや大惨事と思ったが、地元の人「毎回いくつかは失敗するのよね〜」とやはり普通。その後成功した気球 with 花火&蠟燭はあっぱれな美しさだった。ミャンマーに住んで2年目もきっと新しい発見がたくさんあるだろうと思い、楽しみである。



## シリーズ・海外だより その14

## モンバサでの生活

株式会社日本港湾コンサルタント

西野 賢一



## 1. モンバサの歴史と現在

モンバサは人口が約68万人でケニア第2の都市です。アフリカ大陸東側のインド洋に面し、古くから天然の良港があったことからインド洋交易の拠点として栄え、1498年にはポルトガルのヴァスコダガマが当地を訪れています。1593年にはポルトガル人がフォートジーザスと呼ばれる砦を建設し、そこを拠点として実質的な支配を始めました。その後、アラブ人、イギリス人などもこの地に進出し、この砦を舞台に数多くの戦闘が繰り返されたようです。そのような歴史的背景の影響からか、モンバサでは元々住んでいたケニア人の他、アラブ人、インド人、ヨーロッパ人など様々な人種が見られます。

フォートジーザスに隣接する旧市街地と呼ばれる地区は、かつてこの地を統治したアラブ人により建設されたもので、今でも当時の面影をしのぶ街並みが残っています。また、沿岸部はきれいな白浜や珊瑚礁にも恵まれていることからリゾートホテルなどがあり、欧米人などの観光客で賑わっています。



フォートジーザスの外観



旧市街地の街並み

## 2. モンバサでの生活

モンバサ市内には、スーパーマーケットやレストラン、日本料理屋などもあり、私は昨年11月から駐在していますが、今のところ生活に不自由は感じていません。しかし、日本のような先進国ではないため、病気や怪我などになった場合、はたして大丈夫だろうかというような不安はあります。市民の移動手段としましては、近年は自家用車(日本の中古車が多い)も増えてきていますが、マタツ(バンタイプの乗合タクシー)トゥクトゥク(三輪車のタクシー)などが一般的なようです。マタツは運賃が安く、自由に乗降できるため便利なのですが、運転のマナーが悪いところが難点です。他のマタツよりも先に少しでも多くのお客を乗せるためか、時より車や歩行者をすり抜けながら、ものすごいスピードで走行している様子が見られます。油断をしていると歩道に乗り上げてくることもあるため、注意が必要です。また、昔の馬車の時代の名残からか、道路の交差点は一般的にロータリー方式となっており、そこに運転マナーの悪いマタツや一般車が突進してくるため、事故も頻繁に発生しています。



道路を走行するマタツとトゥクトゥク

## 3. ゴミ問題

モンバサでは、所々に突然ゴミの山が発生します。これは、ゴミの処分費が有料であるため(1ヶ月当たり100円位)、それを払わない人達が夜中にこっそりと道端に捨てていくからだそうです。前記のように、自然や文化遺産にも恵まれ、多くの観光客も訪れる場所でもあるので、今後は行政の努力やモラルの向上等により、改善して頂きたい点です。

## シリーズ・海外だより その13

## ナロックの水事情

株式会社エヌジェーエス・コンサルタンツ 技術一部  
八代大輔



ナロック市は、首都ナイロビから約140km西にあり、ケニア国を南北に貫くアフリカ大地溝帯のリフトバレーに位置しています。人口は約42,000人で、マサイ族が多く住み、世界的に有名なマサイマラ国立公園の入口都市であることから、観光業が盛んで、周辺地域の中心都市として栄えています。

ナロック市は標高約1,950mの高地に立地することから、朝晩は涼しく、昼間は気温が上昇するために、最高・最低気温の差が大きい傾向にあります。しかし、年間を通じて、大きな気温の変化が小さいため、雨季を除けば、日本の避暑地で生活しているのと変わりなく快適に過ごすことができます。年間平均降雨量は、786mmと年間を通じて雨が少ないことから、街全体が水不足になっています。昔は地下水に依存しようと井戸を掘っていましたが、地質に由来する塩分濃度が非常に高く、飲料水として適さないため、断念せざるを得ませんでした。

現在は、市内を流れるエンカレ・ナロック川から取水し、浄水処理した上で市内に配水していますが、浄水場の能力を超えて浄水処理しているため、市内の給水栓から出る水は茶色く、大腸菌も残存しており、衛生的にも良好な水道水とは言えない状況です。

しかし、生活をしていく上で、飲み水以外にも水は重要です。そのため、人々は雨水も一滴たりとも逃すまいと屋根の雨樋を曲げて、その先にタンクを設置して、それを洗濯等に使っています。

また飲み水等については、毎日、「キオスク」と呼ばれる公共水栓から20Lのポリ缶で水を購入し、自宅まで運んでいます。水汲み労働は主に女性と子供の役割で、1日に1人で10缶も運ばなければならないのです。

一方で、キオスクから遠方の人や老人はキオスクに行くことができないため、いわゆる「ロバの水売り」から、通常よりやや高い金額で水を購入して、生活用水に利用しています。

私は、2013年4月からナロック市において、計画浄水量4,000m<sup>3</sup>/日の浄水施設、80kmの配水管等の設計を

行っています。私の使命は、子供たちに安全で安心できる水道水を安定的に供給できる施設を建設することと考えています。



シリーズ・海外だより その12

知られざる北部ブラジルの魅力

八千代エンジニアリング株式会社 業務企画部  
新地 貴博



ブラジルといえば、リオのカーニバルや、華麗なサッカーといった派手なイメージが一般的だと思うのですが、北部ブラジルのイメージってありますか？ 今回はそんな知られざる北部ブラジルの魅力について少しだけ紹介したいと思います。

1. ムケッカ

ブラジル料理と言えば、シュラスコ、フェジョアードが有名ですが、ブラジル北部地方の郷土料理のひとつに「ムケッカ」があります。シーフードと野菜を水を使わずデンデ油(パーム油)とココナッツミルクで煮込んだシチューといった感じの煮込み料理です。味は濃厚な海鮮クリームスープといった感じで、一度食べると癖になる味です。



2. Y.YAMADA グループ(日本名:山田商会)

パラ州の州都ベレン市に到着して、やたら目に入るのが「Y.YAMADA(山田商会)」の文字。このヤマダグループ、北部ブラジル最大のスーパーマーケットチェーンであり、この地域に住む人で「ヤマダ」の名を知らない人はいないというほど有名な日系大企業で、パラ州内においては完全な一人勝ち状態といった状況です。現在、全32店舗の総売り上げは約586億円です。小売業としては全国でも13位、7,300人を直接雇用しており、間接雇用を入れれば2万人以上の大企業です。特筆すべきは、ヤマダブランドのクレジットカードを150万枚も発行し、地元密着のビジネスを展開していることです。



プロチーム「パイサンデウ」の公式ユニホームにもYAMADAの文字が…

3. レンソイス・マラニェンセス国立公園

ブラジル北東部マラニョン州の州都サンルイスの約260km東に位置する広大かつ真っ白な砂丘を含む国立公園です。雨季の間にだけ砂丘の至る所に無数のエメラルドブルー色の湖が現れるのが特徴で、仕事柄、これまで世界中の色々な風景を見てきましたが、その中でも間違いなくトップクラスの凄い風景です。ただこのレンソイス、辿り着くまでが本当に大変です。ブラジル最大の都市サンパウロから、州都サンルイスまで飛行機で約6時間、サンルイスの空港から公園の玄関口であるパヘリーリオスまでは更に車で5時間掛かります。私が訪れたのは6月中旬だったのですが、真っ白な砂丘に、エメラルドブルー色の湖が本当に綺麗でした。



## シリーズ・海外だより その11

## ・・・なアルメニア

OYO インターナショナル株式会社  
塩 飽 孝 一



2011年から、アルメニアの首都であるエレバン市の地震防災のプロジェクトに関わっている。それまでほとんど意識しなかった国。初めて国名を聞いたかもしれない。渡航を言われた時は、アフリカに行くのかと思ったほど(アルジェリアと勘違い)。そんな間違いをする人はそうそういないでしょうが、あまりイメージの湧かない国ではないでしょうか。

グルジア、トルコ、アゼルバイジャン、イランと国境を接しているアルメニア。一人あたりのGDPが3,032 USD(2011年:IMF)、世界で初めてキリスト教を国教とした。モンゴルに侵入された経験を持ち、モンゴル人の顔をしたキリストが描かれた石の壁もある。大虐殺も経験したアルメニア。ノアの方舟で有名な、アルメニア人の心の山「アララト山」はトルコにある。宝石加工が主な産業。為替レートの変動が大きい。世界一危険と言われる原発があるアルメニア。

世界的にはコニャックとは名乗れないが、コニャックが有名なアルメニア。打合せの終わりにコニャックを飲ませてくれる。帰国間際の打合せの時にお酒が好きだと言うとおみやげにコニャックをくれる。

美人が多すぎる、でも、日本人から見てカッコいい人は少ないアルメニア。男性は黒っぽい服ばかり着る。男性の髪型はみな短い。日本人かと尋ねられ、日本人だと答えると急に笑顔になる人がいるアルメニア。マンホールの蓋がきちんと閉まっていない。そのマンホールに足をひっかけ転倒した日本人に手を差し伸べてくれるおばちゃんや少年がいる。でも、水をかけるお祭りでカメラを持っている日本人に容赦なく水をかける。スーパーで買い物をしていると勝手にワインをかごに入れてくる女性店員がいる。卓球のアルメニア代表になれそうだと言う青年がワッフル屋さんで働いている。ちょこちょこと血液がRH-の人と出会うことがある。名字の最

後がyanで終わる人がとても多いアルメニア。

資金がないからできることから行動していくのだと言う政府の人がいるアルメニア。その人は、会いに行くと進捗をうれしそうに話す、アイデアをたくさん持っている人。教育を通して安全な社会を構築していくことを考えている人。

大学の教授でもあまり給料がよくないアルメニア。博士課程は就職できなかった人が行くところだと言う人もいる。博士を取っても就職できない人もいるらしい。国内経済状況がよくないので家族で海外に移住しようとしている人がいる。簡単には経済状況を変えることはできないが、アルメニア人は能力がある、人々の意識を変えることによって、アルメニアの経済は変えることができる、私は会社を作ったが、それが目標だ、自分の国を放って海外に移住するなんて考えられないと言うモデルとしてスカウトされたこともある若い女性がいるアルメニア。

もっと発展してほしい、安全で安心な社会を作ってほしい、この国ならそれを実現できるのではないかと思います。国、アルメニア。



写真：ジェノサイド博物館

## シリーズ・海外だより その10

## 発展途上の楽園 ブーゲンビル島



株式会社長大 海外事業部海外技術1部  
小林 克哉

## 1. 親日の島 ブーゲンビル

ブーゲンビル島という名前、聞いたことがある方、けっこう多いのではと思います。第2次世界大戦中、一時は日本軍によって占領され、日本海軍大将だった山本五十六が戦死した島です。島民の間では“日本軍は他国から我々を守るために島にやってきた、そして山本は我々のために死んだ”と解釈されており、結果、島民はみんな親日派です。こちらが日本人とわかると多くの人々に握手を求められ、中には“おまえの名前は山本か”と質問する人もいます。



左がブーゲンビル島、右がブカ島

## 2. 島の状況

ブーゲンビル島はパプアニューギニア国のもっとも東側にあり大きさは四国の半分程度、隣国ソロモンに面しています。首都ポートモレスビーからは飛行機で約90分かかります。飛行場は隣接するブカ島にあるため、飛行機で到着後、船で海峡を渡らなくてはなりません。

島の日中の気温は1年を通して35度と高いですが、湿度が低いので日陰に入れば快適に過ごせます。雨季・乾季はなく毎月200～300mmの降雨があります。島の産業はカカオやコプラの輸出ですが規模は大きくありません。

以前島の南にある銅山が稼働していた頃、多くの労働者でにぎわい非常に活気ある島だったということです。しかし、約25年前銅山をめぐる内戦が勃発し、それまであったインフラが破壊され、そのまま現在に至っています。そのため破壊されたままの建物が市内に点在し、幹線道路はデコボコの状態、電気は一部の地域を除いて供給されていません。

## 3. 島の発展の可能性

島の周囲には美しい海岸そして珊瑚礁があり、多くの観光客やダイバーが訪れても不思議ではありません。さらに島から離れること船で20分程のところにカツオやキハダマグロが釣れるスポットがあるそうです。またブーゲンビル島の南にある湾は非常に美しく以前はその周囲にリゾートホテルがあり多くのオーストラリア人がやってきました。

島には昔の風習がいまだ多く残っており、お祭りではそれぞれの村の衣装・踊りを見ることができ、訪れる人々を楽しませることでしょう。



祭りでの踊り

私はこの島に2年間滞在しましたが、島には外国人が食事できる施設はほとんどなくサーフィンやヨット、フィッシングといったアクティビティーや、快適なホテルは存在しません。肉類・野菜類の大半は船で島外から運ばれますが1週間以上到着しないこともあり、それらが島から消えてしまうことも珍しくありません。こうした状況のため、肉類・野菜類は首都へ行った際に購入していました。

このように決して快適な生活はできなかつたですが、素敵な自然がすぐ近くにありそれらに癒されることが多々ありました。そうした体験から今後多くの外国からの投資があればフィジーやモルジブといった名だたる観光地と肩を並べることができると思っています。

今回“発展途上の楽園”と題したのは、私たちが魅了する素材があるこの島が、今後発展することを切に願う気持ちからです。将来、開発が進んだこの島を今度は自慢の釣竿を持参し尋ねたいと思う今日この頃です。

シリーズ・海外だより その9

南スーダン国ジュバ市の生活事情



株式会社東京設計事務所 海外事業部  
河村正士

2011年7月9日に独立した南スーダン国の首都ジュバ市において、私は2010年10月より日本とこの地を往復しながらの生活を続けております。先日、PKO調査団が現地調査に来られたくらいですから、ジュバ市の生活状況があまり知られていないだろうと勝手に思い込み、その状況をご紹介させて頂くことにいたしました。



独立記念式典：各部族が踊りを披露している

1. ホテル・水

ジュバ市には、コンテナやプレハブを客室にしたホテルが数件あります。どのホテルもガードマンがおり、セキュリティがしっかりしていると聞きますが、先日、あるホテルで部屋が荒らされたとの知らせがありました。まだまだ油断できません。ホテルの水は水道が接続されているホテルもありますが、私の宿泊しているホテルではナイル川の支流から給水タンク車が水を汲んできた水を利用しているようです。雨期には水の色が茶色になるので飲用及びうがいには使用できませんのでご注意ください。



プレハブホテル：部屋の設備の品質が悪いです

2. 食事・レストラン

ティラピア又はナイルパーチ(白身魚)、牛肉及び鶏料理、スパゲティやピザなど普通に食すことができます。しかし、全体的に大味なので1週間すれば飽きます。そこでお勧めなのがラム肉です。私が宿泊しているホテルでは夕方頃、レストランの裏に子羊がひもで繋がれていれば、その夜は新鮮な



子羊：本日は新鮮なラム肉が食べられます

ラム肉を頂くことができます。中東で食べた時より新鮮な感じがします。毎日食べ続けても自分の体臭はそれほど変わりません。

3. マラリア対策

ジュバ市はマラリアの巣窟だそうです。かつてハリウッド映画で有名な俳優ジョージ・クルーニが人道支援のためこの地を訪れましたが、彼もマラリアになったそうです。しかし、マラリア予防薬は少し副作用の問題があります。それは悪夢です。私は、予防薬を飲んで最初の1週間は毎日、女性と夢の中でデートするという素晴らしい経験をしたのですが、1週間後、仕事が忙しくなり、プレッシャーを感じるようになってから毎日、悪夢を見てうなされました。もうあの夢は見たくないと思い、私はマラリアになる恐怖に怯えながらも、予防薬を絶つ決心をいたしました。マラリアの原因となる蚊に刺されないように毎日長袖を着て、蚊取り線香を毎日焚いております。このままマラリアにならなければいいのですが・・・。



マラリア予防薬：副作用として悪夢と書かれている

4. パソコン・インターネット

アフリカでは赤土の細かい粒子がパソコン内に入り不具合を発生させます。かつて、インドにてデスクトップパソコンが故障し、修理業者に来てもらいましたが、彼らの統計によると、パソコンの故障原因の1位が砂埃だそうでした。(全く根拠のない統計です。)この経験を思い出し毎日、布巾でパソコンを拭き、少しでもホコリや砂を取って使用しています。

南スーダン国は独立した直後ということもあり、復興支援活動が盛んに行われている活気のある場所です。私は、この歴史的な時期にこの新しい国で業務を遂行できる幸せを毎日感じております。なお、今回述べさせて頂いた内容は全て私の私見ですので、ご了承の程よろしく願います。



## シリーズ・海外だより その8

## 韓流ブーム

株式会社森村設計 環境部  
水谷 貴俊

世の中の“韓流ブーム”から遅れること数年、私にも“韓流ブーム”がやってきた。昨年韓国からのプロジェクトを担当することになり、韓国を度々訪問している。羽田空港からおよそ2時間の異国でのプロジェクトの計画地は、日本の方にも馴染みの深いドラマ“冬のソナタ”のロケ地で知られる、チュンチョン市(春川市)である。チュンチョン市は、冬のソナタの主人公二人が学生時代を過ごした町であり、日本人観光客も多く訪れているメジャーな町である。残念ながら、私はロケ地を訪問する機会を得られていないが、金浦空港に溢れている多くの日本人の一人として“韓流ブーム”の仲間入りをした。

出張の一番の楽しみである“食”についてであるが、韓国での楽しみは“焼肉”。日本で焼肉と言えば牛肉をイメージすると思うが、韓国で焼肉と言えばサムギョプサル(豚肉)であり、牛肉をイメージする人はいない。牛肉を取り扱う焼肉屋さんでも数件見かけたが、牛肉は日本と同様に高価なようで、人気も豚肉が圧倒的のようである。

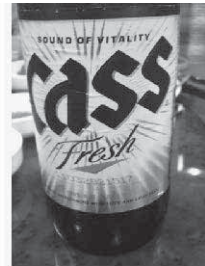
また、ご存知の方も多いと思うが、韓国では料理を注文すると付合せとしてキムチなどがテーブルいっぱい運ばれてくる。その付合せの中に、私の大ヒット料理があった。正式な料理名を忘れてしまったため、卵スープと呼んでいるが、一緒に行った仲間も皆大絶賛の一品である。これまでに焼肉屋さんの付合せでしか出会ったことがないが、是非お勧めしたい。



豚の焼肉



卵スープ



ビール

また、ビールと言えばビンで日本のような生ビールはバーのようなところにしかなく、焼酎の人気の高い。青唐辛子を片手に焼酎を何度も一気飲みしている隣の席の女性たちの豪快な飲みっぷりに、韓国女性のパワーを感じた。

外国では文化の違いを感じることもあるが、お隣の国でも同様であった。韓国の方は、一つのカップに入ったドリンクやスープを、シェアすることが当たり前のようにある。仕事の打合せ中も、上司と部下などが違和感なく一つのカップに入ったコーヒーなどのドリンクをシェアして飲んでおり、大変驚かされた。

現地での移動は地下鉄を利用することもあったが、料金が非常に安く、便利のためタクシーを利用する機会が多い。おそらく料金は、日本の5分の1程度ではないかと思う。タクシーでの移動中には、インチョン空港周辺などを中心にタワークレーンが並んだ建設ラッシュの現場を目にする機会が多く、韓国の勢いを感じることもある。

仕事の話では、設備設計で最も違いを感じた点として、排煙設備があげられる。日本では排煙ダクトのおさまりに苦勞させられることもあるが、私の知るところでは、韓国には居室排煙がなく階段室などの縦系統のみに排煙設備が設置されており、日本の防災に対する安全性確保の高さを感じた。

“韓流ブーム”とは全く無縁と思っていたが、仕事がきっかけとなり、しばらくは続きそうなので、これからもより一層、韓流に浸って行きたいと思う。

## シリーズ・海外だより その7

## ハノイ路線バス事情

株式会社オリエンタルコンサルタンツ  
GC事業本部 道路計画部 菅沼泰久



急速な経済成長を続けているベトナム。2007年1月に初めて首都ハノイへやってきて以来、日本とハノイを行ったり来たりの生活を続けており、ハノイ生活も通算で3年になろうとしています。ここ数年、市内を走る自動車の数は明らかに増えていて、街のいたる所で慢性的に渋滞が発生しており、道路インフラの早急な整備の必要性を身近に感じる毎日です。自動車が増えてきているとはいえ、一般市民にとってはまだ高価で手が届かない存在であるので、市民の足として最もポピュラーな乗り物は何と言ってもバイクです。バイク以外の移動手段としては、ハノイ市内に整備された路線バスが市民の間で便利に利用されています。私も週末を中心に週に2、3回利用しています。



市内を走るバス

ハノイの路線バスは、市内60ルート、市内から近隣の省へ向けて運行している郊外路線9ルートと充実しています。バスを利用する際には、バス停に書いてあるルート番号を確認し、自分の行きたい場所を通るバスに乗ります。料金は前払い制で、車掌さんから直接切符を買います。そして、降りたいバス停が近づいてきたら降車ボタンを押して降りるというシステムです。運賃は、市内ルートが3,000VND（約

12円）か5,000VND（約20円）の一律料金で、距離に関わらずどこまで乗っても同じ料金で移動できるので、タクシーと比べれば格安です。バスは概ね15分から20分間隔で運行されており、冷房完備で座席もゆとりがあるので、車内が空いていれば割と快適に移動することができます。

しかし、やはり途上国の路線バスということで問題も多いことは否めません。例えば、市販されている路線図の中にバス停と路線番号が書かれていますが、ルートは頻繁に変更される上、渋滞などで走行中に突然変更されることも少なくありません。また、渋滞によるバスの遅延は日常茶飯事で、到着時間の予測がとても困難です。バスが満員の場合には、バス停で乗車を拒否されて通過されることもあります。また、日本のバスの様にきちんとバス停に停車して、乗客が乗り降りするのを温かい眼差しで待っていてはくれません。バス停の前に近づくと、乗降口を開いた状態で徐行するので、その間に乗車しなければなりません。駆け込み乗車ならぬ飛び乗り状態です。降りる時も同様に、動いているバスから飛び降りる



バス停

くらいの覚悟が必要です。

このように、荒っぽい運転のハノイのバスですが、お年寄りや妊婦さんが乗り降りする時にはとても親切です。バスの車内でも、お年寄りが乗り込んできると若い乗客は必ず席を譲るので、車内でお年寄りが立っているということはまずありません。その行為が実に自然になされていることから、年長者を敬う儒教文化が彼らの生活の中に今なおきちんと根付いていることを実感します。先日バスに乗った時に、高校生くらいの男子がお年寄りに席を譲ると、そのお年寄りが一人掛けシートと一緒に座るよう勧め、二人で何やら楽しそうに談笑していました。ベトナムでは、全く面識のない他人同士であっても、バスやレストランでまるで友人同士のように親しく語り合

い、時には果物やお菓子を分け合ったりしている光景をよく見かけます。しかし最近では、バスの車内で携帯を握りしめて画面を見つめている若者や、イヤフォンで耳をふさいで自分だけの世界を楽しんでいる若者の姿も多く、古き良きベトナムと発展著しい現代のベトナムの両方を、一つのバスの車内にも見ることができます。

ハノイの路線バスは、我々外国人にとってはまだまだ利用しにくい面もありますが、好奇心と勇気を持って利用してみると、意外に便利で快適だと実感できると同時に、ベトナムの人々の日常生活や文化についてより深く知ることができる気がします。

皆さんもハノイへお越しの際には、ぜひ一度路線バスを利用してみてはいかがでしょうか。



バスターミナルの様子



込み合う車内

## シリーズ・海外だより その6

## 未来都市シンガポール

基礎地盤コンサルタンツ株式会社

国際活動委員会 FP 分科会委員 安田 智広



私は今年度の4月に海外事業部へ配属となってから、ベトナムを2回、シンガポールを1回訪れた。レンガ色で統一されたベトナムの町並みは美しく、おもむきがある。現場までは1時間半以上かけて車で移動したが、その交通事情には圧倒された。皆がクラクションを鳴らしながら、車の間を縫うように抜いてゆく。片側一車線の道路がときどき一方通行の3車線となる。カーチェイスのようである。

さて、シンガポールに降り立ったのは、残念ながらF1シンガポールGPの翌日だった。まず当社のシンガポール支社を訪れたが、日本・中国・マレーシア・インドネシア・ミャンマー・バングラデシュ・インド・スリランカ・フィリピンなどの多国籍の人々が一緒に働いていることに驚いた。シンガポールという国自体も、東京23区とほぼ同じという狭い国土の中に、様々な国の特色が色濃くあって面白い。ホーカーズと呼ばれる屋台街では中華料理やインド料理などの多彩な料理が楽しめ、チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートなどの各エリアでは街が全く異なった表情を見せてくれる。アラブストリートを歩いている時に街中にコーランが響き渡ったことが特に印象的であった。

滞在中には2010年6月にオープンしたばかりのマリーナ・ベイ・サンズ(一部はまだ開発中)に行ってきた。湾



マリーナ・ベイ・サンズ・ホテル

を挟んでマライオンの向い側にそびえたつその姿は、高層ビルの上に巨大な船が乗っているかのような特異な形である。55階建てのホテル3棟の屋上をつなぐスカイパークには展望台があり、20シンガポールドル(約1,300円 高い!)を支払って地上200mまで上がると、360度のファインビューを堪能できた。スカイパークにはホテル宿泊者専用のプールが併設されており、絶景を眺めながら泳ぐことができる。嗚呼なんて贅沢。



スカイパークからの眺望

ところで、シンガポールはIT化もすごい。町中に無料で利用できるWiFiホットスポット(Wireless@SG)が整備されており、外出先でもiPod touchでインターネットが活用できた。また、シンガポールのETCシステム(ERP)は、道路全面に道路標識のようにかぶさって設置されている。つまり、一切止まることなく、通常走行していれば料金が徴収されるのである。動脈硬化のような首都高料金所を見慣れていると、うらやましい限りである。しかも、カーパークまでも同一のカードで決済できるのだから便利である。

休日に上司に観光案内をしてもらったが、自然と当社が関わったプロジェクト案内になっていた・・・高層ビル群を臨む湾岸に二人で座り、昔の話を聞いた。シンガポールへ赴任してきた時には今のベトナムのような状況だったそうで、その後わずか30年で世界に名立たる都市国家まで発展したことになる。そして今では未来都市のような光景が目の前に広がっている。驚嘆せざるを得なかった。

## シリーズ・海外だより その5

## ラオス・ベトナム国境の町 Dansavanh から

株式会社建設技研インターナショナル  
技術研修委員会 YP分科会委員 中島隆志



ラオス国道9号線の最東端、ベトナムとの国境の町 Dansavanh に位置するプロジェクトを担当するようになりこの2年の間何度となく行き来している。ビエンチャンから片道約800km、自動車ですら約10時間かかる。居住している日本人はおらず、宿のテレビはベトナム語、ラオ語、タイ語のチャンネルが入るのみである。旅行者もたまにベトナム側から入った若い欧米人のバックパッカーを見かける程度で少ない。立ち並ぶレストランはベトナム語の看板がほとんどで、すでにベトナムに入ったかのような印象をもつ。特に食文化はベトナム色が濃く、ビエンチャンから同行しているローカルスタッフもギブアップするほど、ちがうようである。



写真 ラオスとベトナムの国境ゲート

それもそのはず、国境から25kmはお互いが自由に居住できる領域なのだそうである。国境に加え25km地点にも通関が設置され24時間体制で検問がなされている。ベトナムの民族を大別する際に「平野の民」、「山の民」という表現をするのを読んだことがあるが、ぽつねんと建つ25kmの通関は、もともと国境などない山の民の生活と国境線という政治的環境に対し現実が歩み寄った姿かと思いをさせる。Dansavanh では山の民は毎朝バイクや自転車、ときにヤギも悠々と国境を越えて互いの国に働きに出てゆく。

国境線は万国共通で常にセンシティブな 이슈 である。カンボジア・タイは世界遺産に指定されたプレヴィヒア寺院をめぐるひと騒動が象徴的だったが、ラオスの南



写真 25km 地点にある通関施設

部とカンボジア北部でもそれぞれが主張する国境線が数百 km 食い違うそうだ。地図上の国境線も実際に現地では数 km の幅の国境帯 (Border Belt) となっており、たとえばこの Belt 内に存在する河川の所有についてはお互いの主張がある。

業務上レポートなどで国土を一般市場で入手できる地図を活用して示すことがあるが、国境線にはよくよくの注意を要する。決まっていなからである。先の例のようにカンボジアで購入する地図とラオスで購入する地図では国境線の位置がよく見ると違う。ほんの僅かなちがいであるが、決定的な違いである。脱線するが、会議用に準備した位置図の国境のレイヤーが何かの弾みで少しずれたことがある。まこと幸いにも笑い話ですが冷や汗をかいた。行政境界をハイライトするのは国内業務で学んだ作図のセオリーであったが、国境については不要にハイライトしないぼんやりとした図が、実は本質に近いということはこの町で生活していると感ずる。



写真 バスで運ばれるヤギ

## シリーズ・海外だより その4

## ラオスの健康生活のすすめ

株式会社 Ides  
三島京子

昨年から何度かラオスのビエンチャンを訪れている。かつては車も少なく、土埃にまみれた道だけが続いている印象の街だったが、日本の援助などもあって道路整備が進み、車も増えて最近では渋滞するまでになった。私たちが滞在中は車で移動するが、その弊害としてよくあるように、どうしても運動不足に陥りがちである。今回は、そんな場合にお勧めしたいビエンチャンでの健康維持の方法をご紹介します。

まずは毎夕6時から、学校の体育館で開かれるエアロビクスクラスに参加しよう。参加費は1回約30円、参加者層は若い女性が中心だが、おばさんもいれば、太ったおじさんも筋肉隆々の若い男性もいて幅広い。日本のスポーツクラブなどで行われているものに比べると、ここのエアロビは動きがシンプルで覚えやすい。さらに、日本でなら一糸乱れずインストラクターの動きについていこうとするのが普通だが、ここでは皆わりと適当にやっており、全く別の振り付けを勝手にやっている人すらいる。こちらもラオス流に無理をせず、自分のペースで適当に楽しめば、運動不足解消にはそれで十分だ。問題は、体育館には壁がなく屋外同然であるため、あまりのろのろしすぎていると蚊に刺されてしまうことである。

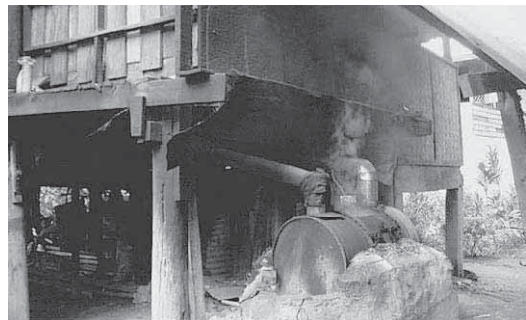


エアロビクス教室 壁のない体育館で行われる。

スポーツの後は、薬草サウナに行って体をほぐそう。

私がよく行く街中のサウナは、ごく普通のサウナ室の形態で壁からハーブの香りの蒸気が出てくる。男女を問わず顔や体に牛乳やヨーグルト、墨などを塗っており、聞けば肌を保護するためという。何となくべたべたしそうなので、この作法はまだ試せていない。

薬草サウナとしてはもう一つ、お勧めの場所がある。街はずれのお寺の境内にある今にも倒れそうな高床式の小屋で、床下で炊いた薬草の蒸気をそのままサウナ室に取り込んでいる。足元から噴き出る薬草の香りたっぷりの蒸気はいかにも効きそうで、地元の人などは蒸気に直接顔を突っ込んだり、背中を当てたりしている。お寺の境内は広く、樹木がうっそうと茂っていて爽やかなので、休日の昼間などにゆっくりと訪れて、小鳥のさえずりや森林浴も楽しみたい。シャワーはドラム缶に溜められた水道水。手桶で水を汲んで頭からかぶり、空を見上げればヤシの葉が風にそよいでいる。一週間の疲れも癒えて、明日からまたがんばろう！と思う瞬間だ。



薬草サウナ サウナ室の直下で薬草を炊く

サウナの後は、夕方の涼しい風が吹きわたるメコン河の岸辺へ向かおう。メコンに沈む真っ赤な夕日を眺めつつ、一気に飲み干すビールの味は格別だ。ついついおかわりをしてしまう。それにしても最後にこれがある限り、あまり健康的とは言えないかもしれない。

シリーズ・海外だより その3

シリアのファーストフード

株式会社日水コン 海外事業部技術部  
主任 木村光志



現地でOJT中の筆者

1~3ヶ月のシリア出張を繰り返している。ホテル暮らしが続くと、当然ほとんどの食事を外食に頼ることになる。シリアでは、レストランと言えどどちらかというと高級店が多く、イタリアンや中華、和食も食べることができる。一方、日本で言う“定食屋”的な気軽に毎日利用するような存在があまり無く、長期滞在時には結構不便な面もある。そこで多めに利用することになるのがファーストフードである。

シャワルマ（日本ではカバブとかケバブとか呼ばれているようだ）は、シリアでよく見かけるファーストフード。電熱器で炙った鳥肉、または羊肉をパセリのような野菜、ピクルス、サワークリームと一緒にホブス（ナンのような薄いパン）で巻いたもの。羊肉のイメージが強いが、鶏肉の方がポピュラーで、値段も3割くらい安い。慣れないうちはピクルスの塩味が強過ぎたので私は抜いてもらっていた。もとはトルコの料理で、シリアのオリジナルではない。

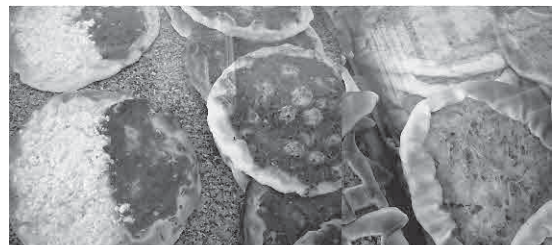


シャワルマの値段はシリアに行くたびに上がっていった。2005年は40円でも買えたが2年後には70円が普通になった。イラク難民増加に伴う物品の欠乏⇒物価の値上がり、という話だったが純粋な経済成長に伴うインフレもあるのだろう。

ファラッフェ（大豆が元の揚げもの、コロッケに少し似ている）も同様にホブスで巻いて食べる。これも日本人には好評。シャワルマも同様だが、店によって中身が違うのでいくつも試してみる楽しみが

ある。これも20⇒40円くらい値上がりした。

ファッタイルは日本でいうピザパンに似ているものだが、種類が多いので数日続いても飽きにくい。味付けもくどくなく、日本人の味覚にも合う。1枚10円~30円、腹具合と気分に合わせて頼めるので非常に便利。オーダーすると、釜から焼きたてをくれるか、予め軽く焼いてあるものを再度釜に入れてアツアツにしてくれる。



シリアの代表的な食べ物としてシャワルマが挙げられる傾向があるようだが、利用者や店舗の数を見ているとこちらこそシリアのファーストフードの王道だと思えてくる。

現在私は日本でこの記事を書いている。いま、次回シリアに行ったらあれを食べよう、これを食べよう、とシリアンフードが私の頭の中をぐるぐる回っている。



## シリーズ・海外だより その2

## 面倒？ 贅沢？ 移動の足はもっぱらタクシー

中央開発株式会社

AJCE 広報委員会 小林大祐

ジュニオル、ジルリアノ、タルシシオ、ゼジンニョ、シャヴィンニョ、マイコン、フランシリノ……。私の携帯電話に登録されている番号の4分の1はタクシーの運転手さんの番号です。

日本ではあまり使うことのなかったタクシー。ブラジルに赴任して半年ですが、なんだかもう一生分乗ったような気分です。

ここはブラジル北東部の半乾燥地帯。「路上に卵を落としたら目玉焼になる」。そんな風に表現されるほど強い日差しが照りつける土地です。加えて、近年の急速な都市化に伴い、治安の悪さで知られるブラジルの全国平均を上回る殺人発生率を記録しています。従って、徒歩で移動する人の姿はほとんど見かけません。

私の生活するリオグランジドノルテ州モソロ市は人口24万。州内2番目の規模の都市です。地下鉄・電車は走っておらず、バスは町の東西と南北を貫く路線がそれぞれ一時間に一本程度あるばかり。公共交通機関が不足しています。

自動車を購入できれば良いのですが、早々に選択肢から削除しました。パワステ・エアコン付の新車になると最低価格帯の小型車でも相場は150万円。これではおいそれと買うことはできません。また、街の中心部でも駐車場というものがほとんど存在しません。路駐スペースを確保する争いが激化していることも購入を躊躇させます。

町ではバギーをよく見かけます。砂丘・海岸が比較的近いからです。またバイクも一般市民の足です。中古のバギーと新車の小型バイクは同じくらいの値段で6～7,000レアル(約30,000～35,000円)ほど(1レアル=約50円)。ここはやはり地元人に倣って、バギーか、バイクを買うべきでしょうか。

バギーは南国らしく鮮やかなピンク、黄色、水色とカ

ラフルな車体カラーが揃っています。あれを駆って週末の海岸を疾走する絵を思い描けば大変に魅力的です。しかし、格好良く運転するにはコツを要するようです。雨期はずぶ濡れを耐え忍び、乾季は灼熱を我慢しなければなりません。

一方のバイクは命の危険が。穴だらけ、デコボコの道路が珍しくないため、事故が多発しています。地元の人はそれでもサイドミラーをわざわざ撤去しています。理由は単に「あると邪魔だしカッコ悪いから」。安全を度外視しています。また、驚くことに素足で颯爽と運転している人も。当地ではサンダル履きでバイクに乗ることは法律で禁じられているのですが、「サンダルはダメでも素足が違反とはどこにも書いていない」というのが彼らの言い分です。そんな猛者ぞろいのバイカーたちの中に混じる勇気と覚悟もなかなか持てません。

という訳で、もっぱらタクシーのお世話になっています。初乗り料金は3レアル(約150円)、町が広くないので遠出しても10レアル程度(約500円)。日本と異なり車種が多様である点も便利です。また助手席に座るのが一般的であるため、自然と会話も生まれ、町のホットな情報を仕入れることもできます。

行き先と用事と時間帯に応じて運転手さんと車種を選び、電話で呼ぶ日々。面倒といえば面倒。贅沢といえば贅沢。途上国(ブラジルは中進国扱いですが)での暮らしはいろいろな面で面倒なことが多いのですが、一方で贅沢なこともたくさんあります。これもそんな一例でしょうか。



いつもお世話になっている  
タクシーの運転手と筆者



## シリーズ・海外だより その1

### ベトナム人はわさび好き



日本工営株式会社  
AJCE 広報委員会 山田 耕三

昨年の六月からベトナムにきている。途中で一時帰国したが、おおよそ十ヶ月が経つ。首都ハノイの北約60kmの町ビンエンに居、ホテル住まいである。

こちらの気候の特徴は、ハノイも含めて曇りが多いことである。特に冬は、おてんとうさまを拝める日が極端に少ない。だから、冬は寒い。これに比べ南のホーチミンは常夏で、乾季はカラッと晴れ、雨期は雨が降るはっきりとした熱帯雨林気候のようだ。南方出身でハノイに在住のあるベトナム人は、首都の生活を享受する意味では良いが、毎年の冬は耐え難いと言う。

日本を発つときに「ベトナムに行ってきます」というと多くの人から「食べ物おいしいところですね」という答えが返ってきた。こちらに来た当初は、ベトナム料理は確かに食べやすいと思っていた。他のアジアの国に比べて薄味で油もあまり使わない。フォー（米からこしらえる麺）やネム（米の皮でこしらえる春巻き）などはなかなか良い。ところが、こちらで長く生活していると食べ飽きてくる。他に食べるものは、というとほとんどない。こちらは田舎なものだから日本料理屋もない。最近、鍋をよく注文する。もともと薄味なものだから、こちらで味付けできる。カニや貝やエビを入れることが多い。最後はご飯とたまごを注文しておじやである。なかなかいける。

たまにローカル・コンサルタントの自宅に招かれることがある。皆自宅はハノイである。写真はそんな時の一枚である。トゥアンさんは私のパートナー。一度目はカニ鍋であった。この日はネムと鶏料理であった。もちろんこんな時はおいしい。

こんなベトナムで食べていて、いつも不思議に思うことがある。ベトナム人がわさび好きだということである。まず、どこのレストランや小さな食堂でも置いてある。生のワサビではない。チューブ入りのねりわ



左からトゥアンさん、トゥアンさんの奥さん、ナムさん、筆者。トゥアンさん宅に招かれて。

さびである。ほとんどが中国製のようである。知っている人は、それがもともと日本の調味料だということは知っている。好きな人は何かにつけて注文する。たいてい小皿に出てくる。どこの家庭でも置いてあるようだ。もちろん、どこの食料品店でも売っている。そして、だれもが生春巻きなどにつけて食べるのである。基本的にはシーフードに使うらしいが、蒸し鶏に付ける人もいて人さまざまである。

写真に写っているナムさんは、わさびが大好きだ。パンをちぎっては小皿のわさびを少しずつつけて食べる。ニコニコしながら食べるのである。ただしナムさんは、同じわさびをつけても刺身は苦手のようなのである。

「なぜベトナムの人はそんなにわさびが好きなの」と問うと、皆お互いの顔を見て不思議がる。そこでこれが愚問だとわかる。好きなものは好きなのである。とりたてて理由はない。

ただ確かなのは、ベトナム人は昔からわさびを口にしていたわけではないということである。聞くところによるとわさびが入ってきたのは1986年のドイモイ政策（経済刷新）のずっと後になってからで、ここ十年くらいのことらしい。でも大好きだから瞬く間に普及したのである。